



ソーシャルワークとケアの倫理：  
その受容と理論的課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 児島, 亜紀子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00003095">https://doi.org/10.24729/00003095</a>

## ソーシャルワークとケアの倫理

### その受容と理論的課題

児 島 亜紀子

大阪府立大学人間社会学部社会福祉学科

#### 要 旨

本稿では、近時ソーシャルワーク理論において注目されつつある「ケアの倫理」に着目し、かかる倫理アプローチのソーシャルワーク理論における受容の経緯およびその過程で見出されたいくつかの理論的課題を検討する。ケアの倫理とは、他者へのケアやニード、感じやすさ、応答責任、関係や文脈といった基本モチーフを有する倫理アプローチのひとつである。これらはソーシャルワークにおいても重要な価値であることはいうをまたないが、驚くべきことに、これまでほとんどのソーシャルワーク論者は、ケアの倫理に関心を寄せてこなかった。このことは、ソーシャルワーカーの職業的アイデンティティにとっては社会正義と人権の概念がもっとも重要であり、相対的にケアやケアリングが軽視される傾向にあったことが原因と考えられる。しかしながら近年、フェミニズムによってソーシャルワークが依拠する正義の道徳理論が批判されるにともない、ソーシャルワーク領域においてもケアの倫理に注目する論者が現れた。現在までのところ、ソーシャルワーク理論は、ケアの倫理を全面的に受容するのではなく、これを正義の倫理を補完するものと見なし、両者を編みあわせることによって、ソーシャルワークにとっての有効なモデルを引き出そうとしていると思われる。ソーシャルワーク理論は、ケアの倫理の中心的なモチーフの一部を受け入れようとしているが、そのことによりソーシャルワークの専門性の根幹に関わる問題が浮上していることも見逃せない。ケアの倫理と正義の倫理をどのように折り合わせ、統合をはかっていくかということが、ソーシャルワーク理論にとっての大きな課題である。

キーワード：ソーシャルワーク、ケア、正義、倫理

#### はじめに

近年、ソーシャルワーク領域において他者へのケアや応答、具体性や個別性、関係や責任といった概念に基礎づけられた倫理アプローチが注目されつつある。ここからは、普遍主義的な正義観念に基づく従来の正統な道徳理論が捨象してきたもの、すなわち非同一的なもの、異質なもの、特殊なもの、道徳の外部にいる他者たちに配慮することによって正義の要請に応えようとする昨今の倫理学や道徳理論の潮流の影響を見てとることができる。本稿では、こうした道徳理論の動向を受けてソーシャルワーク倫理をめぐる議論がどのように変化してきたかを跡づけるとともに、かかる見解をとり入れることによってソーシャルワーク理論が自らの依拠する価値を現在どのように捉え返そうとしているのかを検討する。

## 問題の所在

「社会正義に貢献すること」をミッションとするソーシャルワークは、従来、その倫理基盤としてカント主義や功利主義、ロールズ主義などの伝統的な正義論を重視し、これらを倫理判断の際の準拠枠として用いてきた。しかしながら、先に道徳哲学分野でなされた「普遍主義的な正義論は、かけがえのない特殊性をもった具体的な個人や集団を形式的にも内容的にも排除している」という問題提起を受け、ソーシャルワークにおいても普遍的な正義論からこぼれ落ちる他者の特殊性に注目した、新たな倫理アプローチが模索されるようになった。

ソーシャルワーク領域での問題関心の推移は、ここ10年ほどの間に出版されたソーシャルワーク倫理のテキストに、普遍性と公平性を旨とする従来の倫理アプローチに対する、オルタナティブともいべき倫理アプローチが紹介されるようになったことからもうかがえるだろう。しかしながら、こんにちまでのところ、そのとりあげ方は紹介のレベルにとどまっており、ソーシャルワーク倫理におけるオルタナティブな倫理アプローチの可能性と意義については、論議を深めるまでには至っていない。

本稿においては、オルタナティブな倫理アプローチのなかでも、「ケアの倫理」に焦点づけ、このアプローチとソーシャルワーク倫理との関連に関心を寄せる。ケアの倫理の主張は多岐にわたるが、その中核は人間の本来的な傷つきやすさや依存性に着目した点にある。普遍主義的道徳理論の前提とは異なるこのような人間像は、ソーシャルワーク理論にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

本稿の構成は以下のとおりである。まずもってケアの倫理について概観し、この倫理アプローチの主張と、その性格を明らかにする（【1】）。ついでソーシャルワークが「ケア」の問題をこれまでどのように扱ってきたのかを振り返り（【2】）、ポストモダン・ソーシャルワーク論の展開および正義の倫理への批判を通して、ソーシャルワーク論者がケアの倫理に着目するに至る経緯を概観する（【3】）。続く【4】においてソーシャルワーク理論がケアの倫理をどのように導入し、そこから何をえようとしたかを考察したのち、ケアの倫理と正義の倫理との関連を考えることによってソーシャルワーク理論にどのような課題が与えられたのかを検討する（【5】）。

### 【1】ケアの倫理とは何か

いま、われわれが何らかの倫理的判断を迫られているとする。われわれの判断が道徳的に「正しい」とされるためには、その判断が「公平」かつ「普遍性」をもつものでなければならないとするのが、いわゆる伝統的な倫理学理論の基本的な立場である。ここで「普遍性をもつ」というのは、ある状況における個人には、誰でもあってもつねに同じ原則や規則が適用されるということを意味する。いわば「等しきは等しく扱うべし」ということが、もっとも基本的な正義の普遍的要請である。

しかしながら近時、伝統的倫理学説における正義概念に対して「すべての人を等しく扱うという態度のうちには、根源的な暴力が内在しているのではないか」という疑念が提示されるようになった。いわく、倫理は具体的な他者と共に生きることを模索するために必要なものであるにもかかわらず、原理原則を重んじることに傾注するのみでは、現実を生きる人びとの多様な生のありようを到底捉えることはできないのではないか。いわく、倫理において公平性や普遍性に焦点づけることは、普遍性の名のもとに差異を抹消することであり、かかる態度によっては個別的で具体的な人びとの生の実相に迫りえないのではないだろうか。普遍性を標榜して一般的な他者のニーズを抽象的に捉えるよりも、身近な人への配慮や責任に重きをおき、個々のニーズを掬いとりようとする態度の方がより倫理的なのではないだろうか。こうした批判が道徳哲学をはじめとする人文科学諸領域において提示されたのである。そして現在までのところ、かかる問題提起の嚆矢とされているのが、キャロル・ギリガンによって主張された「ケアの倫理」である。ギリガンの問題提起については、わが国でも既

に多くの論者によって言及されているため詳述は避け、ここでは簡単にポイントを述べるにとどめる。

心理学者であるギリガンは、心理学における道德発達の諸理論（特にエリクソンやコールバーグの理論）が、道德についてのある立場を堅持したものである点に注意を向けた。これらの発達理論においては、道德問題は競合する諸権利のなかから、抽象的な原則に基づいて優先順位を定め、解決をはかるべきものとされた。そして、かかる問題解決を行えた者が、道德的に高い発達段階にあると見なされたのである。なお、この考え方においては、人間を他者から独立した自律的な主体として捉えるため、他者からの分離や個別化をなしえることが自我の成長の証しだとされる。しかしながらこうした発達モデルは男性にこそよく当てはまるのであって、他者を気づかい、周囲の状況に敏感に反応し、さまざまな他者の事情を考慮しようとする女性のふるまいは、道德的に劣ったものとして見なされやすい。まさにこの点をギリガンは批判したのであった。彼女はコールバーグらの道德理論が依拠していた「何が正しいか」を主たる問いとする倫理アプローチを「正義の倫理」と呼び、そこに隠蔽された男性中心主義的な思考に対して疑問を呈した。ギリガンは、「何が正しいか」ではなく、「他者のニーズにどのように応答すべきか」ということも重視されるべきだとして、「すべての人が他者から応答してもらえ、仲間に入れてもらえ、誰も見捨てられったり傷つけられったりしない」（Gilligan 1982: 63）ことを中核とする「もうひとつの」倫理を主唱した。かかる倫理アプローチは彼女によって「ケアの倫理」と名づけられた。

ギリガンによって提起された「ケアの倫理」は、フェミニストたちに大きな影響を与えた。この考え方はその後さまざまな論者によって理論的な飛躍を遂げ、「フェミニズム倫理学」という新たな分野が切り拓かれるに至る。ケアの倫理の影響力は、倫理学の領域にとどまることなく、政治哲学、法学、社会学など人文社会諸科学の広範な分野に及んだ。かかる広範な反応を引き起こしたのは、品川も指摘するように、ケアの倫理が近代の倫理学説のなかではあまり語られることのなかった「異質な価値」を提唱しているからであろう（品川 2007: 145）。人間が本質的に無力であること、傷つきやすいこと、たがいに依存せざるをえないこと、こうした前提に立つケアの倫理の人間観は、正統とされる倫理学説のなかにある自律的な人間観とは対照的なものであるからだ。このようなギリガンの問題提起を受け、ケアの倫理に依拠する論者たちが次々と登場した。第1世代の論者たちが、ケアと正義を対比させたのに対し、第2世代の論者たちは、ケアの倫理が正義によって補完されるべきと考えるなど、その論点には違いが見られる（前掲: 198）。本稿では、他者への気づかい、応答、責任、傾聴、ニーズなどの概念に訴え、具体的な他者へのケアを重視するといった特徴をもつ倫理アプローチを、ケアの倫理と呼称することとする。

## 【2】ソーシャルワークにおける「ケア」問題の位相

ソーシャルワークにおいて、ケアの倫理はどのように受け止められたのであろうか。看護や教育と並んで、ソーシャルワークもケアを不可欠とする領域である。ケアの倫理が唱える「他者への応答」や「責任」、「受容」、「傾聴」といった概念は、ソーシャルワーク実践にとって重要な要素であることはいうをまたない。だがしかし、ケアの倫理に関していえば、ソーシャルワークの反応はきわめて鈍かったのであり、ケアの倫理とソーシャルワークの関連性についての検討は、最近までほとんど行われてこなかったのが実情である（Banks 2001: 48）。このことは、看護学が早くからケアリングやケアの倫理に関心を寄せてきたのとは対照的である。その違いの理由はどこにあるのだろうか。

ソーシャルワークにおける「ケア」は、これまで「コントロール」とともに語られるという傾向があった。ケアとは、この社会において傷つきやすい人びとへの具体的な世話の営みであり、コントロールとともにソーシャルワークの「隅石」であり続けてきたものである。ソーシャルワークにおいてケアとコントロールは対立

する概念ではなく、同一の基盤をもつ（Clark 2000:42）。この社会において脆弱な立場におかれた人びとを有効にケアするためには、しばしば、その人びとに対し害を与えるかもしれない個人や集団から人びとを保護する必要がある（たとえば虐待の危機に瀕している子どもたちを護り、その子を虐待する可能性のある両親から子どもを遠ざけるように）。また、社会において傷つきやすい人びとを「よりリスクの少ない」自己決定に誘導することもある（たとえば、DVに晒されている女性が、ようやく逃げてきた夫のもとに再び戻ろうとする意思をソーシャルワーカーが押しとどめるように）。ケアなきコントロールは単に不快なものでしかないが、このようにケアに配慮しながらコントロールを行うことは、ソーシャルワークにとっては「正しい」職責のはたし方であると捉えられる。

このほか、ケアに関する論点として、このところソーシャルワークは「ケア関係に内在する暴力」の問題を俎上に載せてきた（Orme 2002:804）。ケアには、愛に基づいた利他的行為という側面のほかに、他者に対する侵襲という側面もあることを、児童虐待や高齢者介護における不適切な処遇の事例を通して、ソーシャルワークは学んできたのである。ソーシャルワークは、ケアが権力や暴力に転化する契機をはらんでいることを認識しつつ、注意深くそれを自らの専門性の中核においてきたのだといえよう。かくして、「適切なケアと適切なコントロール」は一對のものとして、ソーシャルワークの基本的な価値のなかに位置づけられてきたのである。

さらにまた、ソーシャルワークにとってケアと正義の接点は、なによりもまず「ケアリングにどのように資源を配分するか」という問いのかたちをとって表出した。ソーシャルワークにとって正義とは、行為の正しさを判断する規準であるだけでなく、資源の配分に関するきわめて具体的な課題であり続けてきたといえるだろう。

ソーシャルワークは「社会正義に貢献すべきもの」としておのが立ち位置を定めてきたことからもうかがえるように、ソーシャルワークがケアを語るときにまなざしの先にはつねに「正義」があった。「1対1の対面的な関係に焦点づけるケアの倫理は、患者やサービス利用者に対しどのように資源を配分するかといった決定や、政策問題の判断の助けにはならない」（Banks 2006:49）「ケア単独では、十分に妥当な倫理になりえない」（ibid.:49）とバンクスが断じる背景には、公正や正義、公平性という概念に対するソーシャルワーカーの忠誠をうかがうことができるだろう。しかしながらこう述べたのち、5年後に刊行された同じ著書の第3版のなかで、バンクスは「近年、ソーシャルワーク領域でケアの倫理に言及する人びとがあらわれ始めた」と述べ、自らをもそのひとりにくわえるに至った（ibid.:60）。

ソーシャルワークにおいてケアの倫理を参照する機運が生まれてきたのである。

### 【3】-1 ソーシャルワーク論と普遍主義批判

実は、このような気運が高まる背景には、1990年代よりソーシャルワーク領域で新たな理論的展開がはかられつつあったという状況がある。1990年代初頭より、ソーシャルワーク領域でも人文諸科学の知的流行の影響を受け、「ポストモダン状況下におけるソーシャルワーク」を主題とした論考が英米のジャーナルに次々と発表されるようになっていた。この時期のソーシャルワーク論の多くが、しばしばリオタールやフーコー、デリダらを引用し、そこでは世界のすべてを説明し尽くす理論（メタ・ナラティヴ）の失墜が強調され、すべての人に適用可能な「人間の本性」があるという考え方や、普遍的な人権概念、人間のニードは普遍的であるといった考え方などが批判された。

この時期ソーシャルワークは、20世紀後半のポストモダン哲学運動によって人文・社会科学領域に持ち込まれた、真理への接近方法、客観性への疑義、解釈の問題などをめぐる認識論的な批判をさかんにとり入れていた。かかる理論的立場は「ポストモダン・ソーシャルワーク」と総称される。この立場は、論者によってその

依拠する理論や枠組みにかなりの違いが見られるものの<sup>1</sup>、真理／真実／事実が普遍的あるいは客観的な基準をもっているという考えに対する懐疑、言語論的転回に基づく「事実(言語によって)社会的に構築されたものである」という認識 数量化による「確実性」に対する批判などを共有し、総じて権力に対する高い関心をもっていた<sup>2</sup>。

これらのうち、ポストモダン・ソーシャルワーク論者によってもっとも広く共有された論点が、普遍の真理なるものへの懐疑であろう。1990年代半ば、ハウは「ポストモダンの言説でもっとも普及したことは、いついかなる状況下にあっても妥当するような真理や判断や経験の普遍的基準など存在しないということである」(Howe 1994:520)と述べた。

しかし、ここで強調されているのは、あくまでも普遍的な「真理」に対する疑義なのであって、真理を認識する普遍的な「理性」主体ではないことに留意する必要がある。

実は、道徳的葛藤の解決が普遍妥当性をどれほど満たしているかを吟味する主体のありように、ポストモダン・ソーシャルワークを標榜した論者たちが批判の矛先を向けることはほとんどなかった。ポストモダン哲学が当初から理性批判を展開していたのにもかかわらず、これに影響を受けたポストモダン・ソーシャルワークが、専門性を担う側である主体の理性に着目するという視点を欠いていたことは注目に値しよう<sup>3</sup>。

しかしながら、理性的主体への批判をいったん棚上げにしたことは、のちに「ケアの倫理」が前提視する人間観を受容しようとした際に、ソーシャルワークにある種の相克と葛藤をもたらすことになる。

### 【3】 - 2 ソーシャルワークによる2大規範の問い直し

自らは理性的主体批判を掘り下げることのなかったソーシャルワーク論者たちであったが、その後は、徐々に近代の道徳的普遍主義批判に目を向けていく。その背景には、1990年代以降の新自由主義思想の台頭および一連の政策動向によって、ソーシャルワーカーの役割が変化してきたという状況があった。たとえば、ソーシャルワーク倫理の新たなアプローチに関心が払われたイギリスでは、ケアマネジメント実践によってソーシャルワーカーのあり方が揺らいでいた。普遍主義的道徳論および正義論への疑義にはじまるソーシャルワーク倫理の問い直しは、ソーシャルワーカーという専門職の職業的アイデンティティを確認するためにも必要な作業であったのである。そのような状況のなか、まずもってソーシャルワーク倫理の準拠枠であるカント主義（義務論）と功利主義の道徳理論が批判の対象となる。この点に関し、ハグマンは以下のように述べる。

西洋の社会と文化における幅広い変化は援助専門職に衝撃を与えることになり、義務論と功利主義の二極論に対する疑問をもたらすことになった。それは倫理に関する旧来の考え方の再検討を可能にした。(中略) 人びとのニーズに直面する専門職にとって、感情や関係性をとびこえて理性を強調するという考え方では、人間というものを的確に捉えることができず、それゆえに義務論と功利主義を十分なものと見なすことが

<sup>1</sup> ポストモダン・ソーシャルワークとひとことでいっても、論者によりその内容は相当異なる。「解放」的な視点からエンパワメントを強調するもの、この考え方とケアマネジメント実践との親和性を唱えるものなど、論者の立場は一枚岩ではない。

<sup>2</sup> すなわち、この立場は、言説をまさに権力的なメカニズムによって規制されるとともに、権力の規則に従属するものとして捉える。多くのポストモダン・ソーシャルワーク論者は、「理性的」な言説は権力と結びついて「知」となり、まさにその知の力でさまざまな「理性的でないもの」を排除するというフーコー的認識を基盤とし、権力の問題を捉え返すことを試みている。

<sup>3</sup> もっともこの点について一部の論者は自覚的であった。わが国における主体論争の状況については、たとえば、加茂陽と村上雅彦の議論を参照せよ。加茂陽編(2000)『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社、253ページ以下参照。

できなくなったのである（Hugman 2005:7）。

周知のごとく、ソーシャルワーク倫理の基礎を支えてきたのは、カント主義と功利主義であるとされる。これら近代を代表する正義のアプローチに対し、ソーシャルワーク論者からいくつかの問題提起がなされた。たとえば、ベケットとメイナードは、「人間に対する尊厳」の基礎づけとなる「理性的主体」という人間像<sup>4</sup>を俎上に載せ、脳の障害のために合理的で理性的な思考を失った人のなす決定が、そうでない場合に比べて尊重されないのはなぜなのかという疑問を提起している（Becket and Maynard 2005:37）。また同様に、彼らは功利主義に対しても、さまざまな差異をもつ人びとの多様な便益やコストを功利主義はどのように計測するのかと問い尋ねている（ibid.:41）。むろん、こうした疑問は、カント主義や功利主義に対する典型的な批判にほかならない。しかしながら、2大規範に基礎をおきつつ、これまで行為の公平性と普遍妥当性を重要視してきたソーシャルワークが、この時期、倫理のテキストにおいてかかる疑問を明確に示したということは注目すべきと思われる。

#### 【4】 - 1 ソーシャルワークとロールズ正義論批判

正義のアプローチに対する異議申し立ては、伝統的な2大規範にとどまらず、正義論の系譜の正統な継承者ともいうべきロールズにも及んだ。配分の正義を説くロールズは、カント主義や功利主義と並んでソーシャルワークに大きな影響を与えてきた論者である。その理論に対し、特にフェミニズムに共感するソーシャルワーク論者から、ロールズの正義論の前提となる個人は標準的な市民／標準的な近代の主体であって、そこから外れるものに対して十分な配慮がなされていないことを指摘する声が上がった<sup>5</sup>。

かかる点にくわえ、ロールズの正義論は、ソーシャルワークから見ても次のような難点があるとされた（Orme 2002:807-808）。ロールズは、人間の生はさまざまな仕方で繰り広げられることを認識しているが、それはジェンダー、民族、文化、階級、宗教などの多様性（diversity）を踏まえてのことではない。利用者を支援するための資源のなかには、配分という概念になじまない非物質的なものが含まれている<sup>6</sup>。ロールズのように正義を公的な領域に限局するならば、DVやレイプ、虐待など、家族や人間関係レベルで生じる非正義を顧みないことになる、などである。

<sup>4</sup> 実は、尊厳の基礎づけを主体の理性におかずとも、すなわちその人間がいまここに生きているというその事実のみに帰結せしめることは、リベラリズムにおいても可能である。さらにいうなら、尊厳は「根拠なく端的に与えられてしまうようなもの、第三者的な規準によっては確定し尽くすことのできない超越的な価値を指し示すものとして了解されるべきもの」である（北田 2003:262）。北田暁大(2003)『責任と正義』勁草書房を参照。「いま、ここに共に生きている」ことのみを尊厳の準拠点として倫理を構成するなら、それはケアの倫理に近いものになるだろう。

<sup>5</sup> フェミニズム倫理学を標榜するベイアーが、リベラリズムの基盤をなす「自律した主体」概念に言及し、この考えには人間が相互依存的な関係にあることが考慮されていないと批判したことを想起されたい（Baier 1994）。同様の視点に立脚したロールズ批判としては、ロールズが依存を考慮していないとするもの（Kittay 1999）、またロールズの個人観は社会的アトミズムに依拠しており、人びとが関係のなかに組み入れられていることを否定しているとするもの（Nogel-Docekal 1999=2006:197に依拠）などがある。これらはいずれも人間の本质が「自律的」でないことに着目している。フェミニズムに共感するソーシャルワーク論者に、これら諸理論はさまざまなインスピレーションを与えている。

<sup>6</sup> オームは、ヤングの言葉を引きながら、ロールズのいう「基本財の配分」に言及し、「基本財が物でなくて良好な人間関係である場合には、どのような権利が配分されるのだろうか？（中略）自尊心（を保つようにするための援助：引用者注）には、配分のとり決めには帰着しない数多くの非物質的な条件が含まれる。エンパワメントとは力を配分することではなく、力を与えるというプロセスに（利用者を：引用者注）巻き込むことである。」と批判している（Orme 2002:807）。

要するに、2大規範にせよ、ロールズ主義にせよ、これらの正義のアプローチが前提視する「自律的な個人」のモデルは、あまりに一般的で抽象的に過ぎ、そこには人間の本質的な傷つきやすさや相互依存性、かけがえない特殊性や個性に対する視座が欠落しているということである。普遍性と公平性を旨とする正義のアプローチに対し、まさにこの点こそがケアの倫理を主張する論者たちが強調した点でもあった。

かくして、ソーシャルワーク論者たちは普遍主義的道德理論に看過できない課題があることを改めて認識するに至り、「他者に開かれてあること」や「コミュニケーションや解釈、対話」を重視するケアの倫理に目を向けることとなったのである。

#### 【4】 - 2 ケアの倫理の人間観

パートン（2003）は、ケアの倫理の仮定する人間の相互依存的な関係性や、ケアの倫理の実践が内包する他者に対する注意深さ、敏感さ、反応、応答責任、交渉、相互承認といった価値を評価し、ケアとは状況のもとにある思考や、状況のもとにある倫理を鍵とする社会的な実践であると述べている（Parton 2003:11）。また、パートンは、ケアのアプローチが具体的な他者に対するまさにその場における配慮を企図している点に注目し、「ケアの倫理」は現代のソーシャルワークがその専門性を考える上での準拠点になりうると考えた。

一方、ケアの倫理の鍵概念である「依存状態にある人間」に着目した論者もいた。ロイドは、フェミニスト倫理が「合理的で自律的な個」を、人間生来の状態であるとは観念せず、人間がそもそもケアを必要とする存在だと捉えていることを指摘し、「依存状態はわれわれの実存の中核であるにもかかわらず、ケアを必要とすることがゆがめられて理解されている」としてフェミニストの見解を支持する（Lloyd 2006:1175）。ロイドは、「フェミニストによるケアの倫理の中心点は、ケアを人間の経験の基本的な相として捉え直し、ケアというものが弱さや『他者』を必要とすることだけに関連しているかのような現在の考えを否定することにある。」（ibid.:1182-3）と述べ、依存状態が「普通の状態である」という考えを広めるためには、ケアを提供すべきか否かという必要性に焦点を合わせるのではなく、人間にとってケアは必須のものだという、経験に基づいたモデルを積極的に展開すべきだと主張した（ibid.:1183）。

しかしながら、ケアの倫理をソーシャルワークに援用するにあたっては、以下のような困難が予測される（ibid.:1183）。まずもってソーシャルワーカーたちにとって、依存という概念につきまとうネガティブなイメージを払拭することが難しいということがあげられる。また、ケア関係は親密圏のような狭い範囲の人間関係を前提としている。このため、「連帯」のように社会正義に訴えかける言葉に魅了される傾向のあるソーシャルワーカーにとっては、ケアの倫理はあまり魅力がないと感じられるかもしれない（ibid.:1183）。しかし、より重要なことは、ケアの倫理を受容した場合、ソーシャルワーク倫理においてそれまで中核におかれてきた「自律」の価値をどのように捉え返すべきかということである。

#### 【4】 - 3 ケアの倫理と正義の倫理との統合

ところで、ソーシャルワーク論者たちは、ケアの倫理における人間観のみを考察対象としたわけではなかった。ケアの倫理の第2世代が「ケアと正義の関係」を1つの争点としていたことは前述したが、ソーシャルワーク論者たちもまた、両者の関係をいかに捉えるべきかを検討しつつあった。

ソーシャルワーク論者が両者の関係に関心をもつのは、道徳哲学領域で行われた普遍主義的正義論への批判が、ソーシャルワークにとっても看過しえないものであったためであろう。特に、ソーシャルワークの原理の1つである「社会正義」概念を、理論的に支えてきたロールズ正義論への批判は、ソーシャルワークの根幹を揺るがしかねないインパクトをもっていたと考えられる。



ロールズの「無知のベール」のもとでは、人間の属性はもとより、その他のあらゆる個性が抹消されるため、自己と他者の境界は未分化となる。すべての人間が無知のベールのもとで平準化された結果、固有の他者という観念は必要でなくなる。ある他者の位置に他のいかなる人間をも代入可能であるような、こうした集団においては、みなが等しいのであるから、交渉も対話も必要ない。普遍主義を掲げるこのモデルはいわば閉じられており、自己とは異質なものであるという本来の意味での「他者」の存在は否定されている。

おそらく、ソーシャルワーク論者はかようなロールズ批判を深刻に受け止めたのではないだろうか。なぜなら、ソーシャルワーク原理としての社会正義は、人びとが多様であるという認識に立脚しており、交渉も対話もはじめから必要とされないような「普遍主義的」モデルは、ソーシャルワーカーにとって支持しがたいものであるに違いないからである。

具体的他者への配慮を主張する「ケアの倫理」は、ソーシャルワーカーにも十分魅力的なものに映ったと思われるのだが、さればとって、ソーシャルワークにおける公正、公平といった価値を放擲することは、ソーシャルワーカーにとって到底首肯しえない。そこで、ソーシャルワーク理論において、配慮と公平を架橋しようとする試みがなされた。そのひとつの例は、討議倫理をソーシャルワークに適用することであった。

たとえば、オームは、ケアと正義を架橋する「対話モデル」をソーシャルワークの文脈において捉えようとする（Orme 2002:810を参照）。このモデルは、ベンハビブのいう、討議倫理における人びとの関係のありよう、すなわち「それぞれ利害関心をもち、私の行為や私の行為の帰結が何らかのかたちで影響を及ぼしえる、あらゆる道徳的主体は、私の道徳的会話のパートナーである」（Benhabib 2004 = 2006:12）という前提を共有したものと考えられる。

しかるになぜ対話モデルなのか？ ソーシャルワークにおいて、利用者に資源を公正に分配するためには、人びとの声が確実に聞き届けられ、ニーズが明らかにされる必要がある。ロールズの正義論で措定されているのは、あくまでも一般的な他者であり、そこからは具体的な他者の具体的なニーズを導出することができない。さればこそ、具体的な他者の具体的なニーズを知るためには、他者に接近し、彼ら／彼女らの声を聞き取る必要がある。利用者との対話なきソーシャルワークは、問題を1つの次元で表象し、利用者を容易にステレオタイプ化してしまう（Orme 2002:811）。この社会が他者に関わられてあり、われわれすべては他者とともにあるのだとすれば、道徳的対話を通して、われわれは他者のニーズを適切に聞き取らなくてはならない。すなわち他者との対話は、正義の要請のために不可欠なのだ。オームにしたがえば、対話モデルの意義はそうに観念されるだろう。

「対話モデル」による特定の他者とのコミュニケーションに根ざしたソーシャルワークは、個別の状況における特定の対象への感情のこもったケアを行為の倫理性の不可欠の要素と見なすケアの倫理の観念（Bubeck 1995:190 ただし品川 149 に依拠）とも響き合う。オームによれば、対話モデルは、ケアの倫理と正義の倫理の対立図式を無効ならしめるものであり、それはまた、公的領域／私的領域、ケアするもの／されるものという二分法に対する挑戦でもあるという（Orme 2002:809）。具体的な他者のさまざまな声を掬いとり、個々のニーズを明らかにし、ニーズを充足させるべく人びとに働きかけるソーシャルワークは、正義の要請にかなったものとして観念されるということであろう<sup>7</sup>。

また、このモデルはケアの倫理の方向から解釈することも可能である。ここで、ギリガンがケアの倫理という異質な倫理アプローチを「発見」した際のことを想起されたい。道徳問題を解決するにあたり、被験者であ

<sup>7</sup> なお対話モデルを採用するならば、尊重されうるべき他者の領域から逸脱した人間（犯罪者、虐待者等々）に対してもケアが要請されねばならない。すなわち、誰であろうとひとり残らず声が掬いとられることがケアの倫理の求めるところであり、このことは正義の要請にもかなうからである。

った子どもの片方は与えられた設問の前提条件を比較考量し、優先順位をつけつつより妥当と思われる倫理判断を導き出して、これを論理的に説明した。これに対し、もうひとりの子どもは、ディレンマの前提条件を所与とせず、人びとと具体的にネゴシエーションすることによって前提条件を変えるよう働きかけ、問題解決の糸口を見いだせないかと考えたのである。後者、すなわち道德上のディレンマは複数の責任が衝突するところにあると認識し、問題に対話によって解決に導こうとする態度のなかに、ギリガンは与えられた前提から正義を導出する態度とは異なる倫理上の「もうひとつの声」があることを発見したのである<sup>8</sup>。与えられた前提条件を疑うということをソーシャルワーク実践に当てはめてみるとどうなるだろうか。利用者のおかれた社会的条件を所与とせず、すなわちその状態を前提視して利用者の問題解決をはかろうとするのではなく、利用者に対話しつつ、彼ら／彼女らとのおかれた状況との双方に働きかけ、解決の糸口を探ろうとすること。主体を条件の側に当てはめるのではなく、与えられた条件を変えていくような働きかけをすること。これこそがソーシャルワークの特徴といえるのではあるまいか。

そしてこの点に、ケアのアプローチと正義のアプローチとが編みあわされ、ソーシャルワークにおける対話モデルとして結実したことの意義を認めることができると考えられる。

## 【5】 - 1 対話モデルの妥当性

しかしながら、オームが採用しようとする対話モデルには、以下のような疑問も生じる。

まず第1に、竹村（2002）も指摘するように、コミュニケーションはつねに成立するとは限らない。「正しい」声が「正しく」聞き取られないといった状況は、ソーシャルワーク実践の過程においても生じうる。「発話はかならず、言語に仮託された、むしろ言語そのものである権力の洗礼<sup>9</sup>を受けている」からである（竹村 2002:271）。ソーシャルワーカーが、この社会において「まっとうなものとして」承認された、すなわち支配的な言語たとえばリベラリズムの枠組みのなかで使用される言語はそれにあたるだろう。無自覚にあるいは無批判に用いる場合、利用者の声が誤って受け取られる可能性は否定できない。ケアの倫理の提唱者たちは「共感」が自己への同化を意味するものとして、これをケアから区別する。自分が他者の立場に立ってその声を聞き取りえると過信すること、かかるナイーヴさはケアの倫理の否定するところである。この点は、ソーシャルワークが他者理解を志向する際に注意を払うべき点であるだろう。

第2に、対話モデルの理論的基盤である討議倫理は、近時「当事者のパースペクティブ」を重要視しており、このことは確かにソーシャルワークに大きな示唆を与えうるものの、対話に参加することが前提とされているのは、言葉によって自らの要求を表明でき、あるいは他者の要求を理解する認知能力を有した道德的主体であるという点に留意したい。対話に参加する諸人格は、「相互に具体的な他者として知覚し合うべきレベルに必ず達していなければならない」（Honeth 2000 = 2005:165）。しかしながら、現在ケア関係にあるなかで、あるいは将来のケア関係が予想されるなかで、こうした態度やふるまい、能力がどの利用者にも同等に要求されるのだろうか。そうではあるまい。しかし、この点についてオームがどのように捉えているのかは明確ではない。

また、そもそもケアの倫理は、正統とされる普遍主義的道德理論すなわち正義の倫理とは全く異質の価値を志向するものとして提起されたものではなかったか。バンクスも指摘するように、両者が「同一の価値基準を

<sup>8</sup> ギリガンが用いているのは「ハインツのディレンマ」の事例である。その内容は以下のとおり。「ハインツの妻は、病気に罹って死に瀕しているが、ある薬を投与すれば彼女を救うことができる。この薬は非常に高価で、ハインツには買うための十分なお金がない。この場合、ハインツは薬を盗んでも妻を助けるべきか、否か。」

<sup>9</sup> このことは、「依存状態」という言葉の用いられ方を見れば明らかであろう。「依存」にしる「依存状態」にしる、そこから連想される概念はネガティブな意味合いをもつものばかりである。

もたない」ならば、この2つの倫理アプローチを対話モデルという形式において統合することは可能なのだろうか。ケアの倫理の主要な論点の1つは、普遍主義が実質的に排除してきたものを救い出すことにあった。具体的な他者の特殊性を擁護することを目指しているのはそのあらわれであり、この観点はソーシャルワークにとっても受容しうるものであったことは見てきたとおりである。しかし、対話モデルはケアの倫理と正義の倫理を等格と看做して編成されたものではない。注意深く見ればわかるが、このモデルはあくまで普遍主義の枠のなかで思考された、正義のパースペクティブの拡張版なのである。ソーシャルワーク論者たちがロールズの正義論を批判し、ケアの倫理の主張に賛同の意を表しても、彼ら／彼女らの依拠する倫理は依然として普遍主義の枠のなかに留まっている。ソーシャルワークは一貫して「普遍主義」と「正義」をその価値において最重要視した営みなのである。

## 【5】 - 2 ケアの倫理をめぐる問題点

行論も終わりに近づいた。以下では、ソーシャルワークとケアの倫理をめぐる課題について述べることにしたい。

ソーシャルワークがケアの倫理に惹かれていったのは、より広い哲学・思想の知の動向と期を一にしているポストモダン・ソーシャルワーク論が、普遍主義批判 といっても内容は普遍的な「真理」批判なのだがを展開していたことから理解できる。ポストモダン哲学運動は、普遍主義批判や理性批判からホネットのいう倫理的転回を経て、正義の問題に帰着した。ケアの倫理は、ポストモダニズムの倫理学の、「非同一的なものと適切に関わり合うことによって初めて人間の正義の要求が満たされる」(Honneth 2000=2005:146) という中心的モチーフを共有している<sup>10</sup>。ソーシャルワークがケアの倫理を評価するのは、もともとソーシャルワークがもつ、感情に捲き込まれてあるところの人生の各局面を扱うという援助の特徴が、人びとの態度や動機、他者との関係のなかで構成され、「状況のもとにある」人間への関心を基礎とするケアの倫理の主題に親和的だからである。

ソーシャルワークがケアの倫理に関心を寄せつつ、討議倫理からとり出した対話モデルは、個性あるすべての人びとが等しく声を聞き届けられるチャンスをもつべきだという普遍主義的な正義理念にも訴えるものであった。対話モデルは「個別的で具体的な他者の声に応える」というケアの倫理の要請を正義の倫理に挿入し、正義のパースペクティブを拡張したものと理解することができる<sup>11 12</sup>。

また、ロイドのいうように依存状態を本質的な人間のありようとして措定するならば、われわれは次のよう

<sup>10</sup> ソーシャルワークがポストモダン倫理学や道徳哲学の一連の果実をとり入れようとしたのは、この時期、ソーシャルワークが価値志向を強めていたこととも関係する。真理批判は社会構成主義とむすびつき、ナラティブ・アプローチやストレングス視点などの実践モデルに結晶するが、この立場をとるソーシャルワーク論者はいずれも関係性や意味連関、文脈などを重要視した。かかる基本的モチーフが、ケアの倫理の基礎概念である人間の相互依存性や、他者の個別性と親和性があることは明らかであろう。

<sup>11</sup> ケアと正義の統合は、また別の形で示される。たとえば、ケアの倫理の議論のなかには、健全なケア関係のために、ケア関係の継続はケアラーの自律によって決められねばならないとするものがある(Clement 1996 ただし品川 198 に依拠)。ケアラーが搾取されないためには、ケアラーが自律的である必要があるというのがその主張の骨子である。かかる立場に対し、品川はケアラーによる抑圧的な干渉を懸念して、ケアのレシピエントもまた自律的であることが必要であるとする(前掲:198)。ケア関係からの退出の選択が、ケアラーの側にのみあるとするなら、これは正義の観点からして妥当ではない。ケアラーのみならず、ケアのレシピエントの自律を担保しようとする品川の立場に、筆者も賛同する。

<sup>12</sup> ソーシャルワークが、これまでもケアとコントロールの関係に関心を寄せてきたのは、片方のみが自律しているケア関係のなかで生じる抑圧的な干渉を否定的に捉えてきたからである。むろん、現在のソーシャルワーカーはこうした非対称な関係性において、ケアされるものをエンパワメントすることを主唱するだろう。

な疑問に説得的に答えていくべきであろう。

まずもって、依存とはそもそもどのような状態をいうのか。依存と対置され、自律と等価と見なされる「独立」( independence ) 概念がシチズンシップの要件であるとすれば、かような標準的市民に「なること」をソーシャルワークが要求することをどのように捉えればよいだろうか。たとえば野崎(2003)は、カント的な自己立法としての自律観を前提としたとき、福祉受給者が「その生活に必要なものを受け取ることに関し他人の設定したルールに従わねばならないのであるから」自律の重要な要素を欠くのだというゲワースの言葉を紹介している(野崎 2003:41)。かかる自律観は古典的なものだと思念するが、これに対し、ソーシャルワークはそうではない「別の」自律概念を構成すべきだろうか、またその場合「別の」自律概念とはいかなるものでありうるだろうか。

いずれにせよ、ケアの倫理の人間観を受容するのであれば、正義の倫理の依って立つ基盤である自律概念および自我観を、われわれは今一度見直さねばならないだろう。すなわち、自律の基礎となっている自我観は、サンデルの述べるような「負担なき自己」( the unencumbered self ) と観念されうるのは、これは果たして正義が要請する自我観であるのか、かかる自我観はしばしば相互依存の網の目のなかにある自己とは対立的に捉えられるが、自律概念を再解釈することによってケアの倫理の人間観と折り合うことは可能なのかといった問題を、討議倫理における自律概念の検討とあわせて、われわれは吟味していく必要がある。また、この点と関連して、カント主義的な人格概念や人格に由来する「尊厳」についても、再考する余地があるだろう。ポストモダン・ソーシャルワーク論においていったんは棚上げされた「理性批判」もこの文脈で改めてとりあげられねばならない。

## むすびにかえて

かくして、ケアの倫理に着目することによって、価値志向を強め、自らの職業的アイデンティティを確認しようとしていたソーシャルワークは、自らがもともと他者への配慮や責任、他者への応答といった諸価値の重要性を改めて再認識することになった。その一方で、ケアの倫理の中核概念、わけてもその人間観を受容することによって、ソーシャルワークが新たな問題に向き合わざるをえなくなったのもまた事実である。より根本的な問題は、理性や合理性の優位を否定するケアの倫理を受容した場合、ソーシャルワークの専門職としてのあり方がどのように変容を迫られることになるのかという点である。この点、オームの提唱する対話モデルは、討議倫理を基礎としていることからわかるように、理性優位のモデルであるから、伝統的なソーシャルワークの専門職観と齟齬をきたすことはない。

ここまでの議論によって、ケアの倫理の提示した問題点は、ソーシャルワーカーの援助観やその専門職としてのあり方などをめぐる広範な領域に及ぶものであることが明らかになった。ソーシャルワーク理論において、正義とケア、自律と依存、人間の能力と尊厳といったさまざまな価値の連関を明確化し、ソーシャルワークの知として練り上げるという作業は、まだ緒についたばかりといえよう。

本稿においては、ソーシャルワークがケアの倫理に触発されて導き出したいいくつかの論点を抽出しえたにすぎない。本稿で示したソーシャルワークの価値およびケアの倫理の基礎モチーフについては、それらの連関や基礎づけを整理し、あるものについては概念を再構成し、解釈し直し、修正をくわえることによって、より精緻なソーシャルワーク実践の理論と思想を練り上げていく必要があるだろう。かかる検討作業は、すべて今後の課題である。

## 文 献

- Baier, A.C. ( 1994 ) *Moral Prejudices :Essays on Ethics*, London, Harvard university Press.
- Banks, S. ( 2001 ) *Ethics and Values in Social work*, 2nd ed, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- ( 2004 ) *Ethics, Accountability and the Social Professions*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- ( 2006 ) *Ethics and Values in Social work*, 3rd ed, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Becket, C. & Maynard, A. ( 2005 ) *Values & Ethics in Social Work*, London: Sage.
- Benhabib, S. ( 2004 ) *The Rights of Others: Aliens, Residents, and Citizens*, Cambridge University press=ベンハビブ、向山恭一訳『他者の権利 外国人・居留民・市民』法政大学出版局、2006 年。
- Clark, C. ( 2000 ) *Social Work Ethics: Politics, Principles and Practice*, Basingstoke: Palgrave .
- Gilligan, C.( 1982 ) In *A Different Voice,: Psychological Theory and Women's Development*, Cambridge, MA, Harvard University Press.
- 狭間香代子 ( 2001 ) 『社会福祉の援助観: ストレngths 視点・社会構成主義・エンパワメント』筒井書房。
- Honneth, A. ( 2000 ) *Das Andere der Gerechtigkeit, Aufsätze zur praktischen Philosophie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp = ホネット、加藤泰史・日暮雅夫訳『正義の他者 実践哲学論集』法政大学出版局、2005 年。
- Howe, D. ( 1994 ) 'Modernity, Postmodernity and Social Work', *British Journal of Social Work*, 24, 513-532.
- Hugman, R. ( 2005 ) *New Approaches in Ethics for the Caring Professions*, Basingstoke :Palgrave Macmillan.
- 加茂陽編 ( 2000 ) 『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社。
- 北田暁大 ( 2003 ) 『責任と正義』勁草書房。
- Kittay, E.F. ( 1999 ) *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*, Routledge.
- Lloyd, L.( 2006 ) 'A Caring Profession? The Ethics of Care and Social Work with Older People', *British Journal of Social Work*, 36, 1171-1185.
- Nagl-Docekal, H. ( 1999 ) *Feministische Philosophie: Ergebnisse, Problem, Perspektiven*, Frankfurt am Main: Fischer Tashenbuch Verlag GmbH = ナーグルト = ドツェカル、平野英一訳『フェミニズムのための哲学』青木書店、2006 年。
- 野崎綾子 ( 2003 ) 『正義・家族・法の構造変換』勁草書房。
- Orme, J.( 2002 ) ' Social Work: Gender, Care and Justice', *British Journal of Social Work*, 32, 815-830.
- Parton, N.( 2003 ) 'Rethinking professional practice: The contributions of social constructionism and the feminist ethics of care', *British Journal of Social Work*, 33(1), 1-16.
- 齋藤純一 ( 2003 ) 「依存する他者へのケアをめぐる」『年報政治学』、日本政治学会編、179-196、岩波書店。
- Sevenhuijsen, S.( 1998 ) *Citizenship and the Ethics of Care*, London, Routledge.
- 品川哲彦 ( 2007 ) 『正義と境を接するもの: 正義という倫理とケアの倫理』ナカニシヤ出版。
- 竹村和子 ( 2002 ) 『愛について: アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店。
- Tront, J.( 1993 ) *Moral Boudaries: A Political Argument for an Ethics of Care*, London, Routledge.
- Zingaro, L.( 2007 ) *Rhetorical Identities: Contexts and Consequences of Self-Disclosure for 'Bordered' Empowerment Practitioners* = ジンガロ、鈴木文・麻島澄江訳、『援助者の思想』、御茶の水書房、2008 年。

## **Social work theory and the care of ethics: current issues and future directions**

Akiko Kojima

Department of Social Welfare, School of Humanities and Social Sciences, Osaka Prefecture University

### **Abstract**

This article aims to explain that in recent times, the arguments for the ‘ethic of care’ are being considered in relation to social work theory. This ethical approach has such basic motifs as care, need, individual responsiveness, and attentiveness. Though this is an important notion, few social work writers have paid attention to the ethic of care in social work. In social work, justice and human rights are considered to be more important than the notion of care. However, it has recently emerged by feminist ethics that the theory of rational justice presupposes an abstract, general moral agent who is separated from the others. How can the ethic of care then be incorporated? Social work is going to draw an effective model by not separately incorporating the ethic of care but by combining it with the ethic of justice. This approach has received partially the ethic of care, and resulted in a practical model called the ‘dialogue model’. As such, the problem now is striking a balance among care, justice, and other social work values.

Key words: social work, care, justice, ethics